

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2016 年 7 月

「クリスチャンの節制」 「社会生活」 「第一の封印と第二の封印」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「クリスチャンの節制」

4

聖書の教え

朝のマナ

「社会生活」

8

今日のわたしの生涯

現代の真理

「第一の封印と第二の封印」

40

七つの封印と生ける神の印

力を得るための食事

「ひやむぎで作る冷やし中華」

50

お話コーナー

「エジプトへ」

52

イエスの物語

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話：0494-22-0465

FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2

電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>

メール：support@4angels.jp

発行日 2016 年 6 月 30 日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Dreamstime on front cover;

HighRes on pages 8, 52, Joe Maniscalco

on back cover.

Printed in Japan

キリストはよみがえりであり、いのちである

信じる者にとって、キリストはよみがえりであり、いのちである。罪のために失われたいのちは、われらの救い主をおして回復される。なぜなら、キリストはご自身のうちにいのちをもっておられて、みこころのままに人をよみがえらせられるからである。主は不死を与える権利を受けておられる。キリストは人性のうちにあってお捨てになったいのちを、ふたたびとりあげて人類にお与えになる。キリストはこう言われた、「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。」

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう」（ヨハネ 10:10,4:14,6:54）。

信じる者には、死は小事にすぎない。キリストは、それをたいしたことではないかのように語っておられる。

「もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであろう。

……わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろう」（ヨハネ 8:51,52）。クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒にすぎない。生命はキリストと共に神のうちにかくされ、「キリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう」（コロサイ 3:4）。

キリストが十字架から「すべてが終った」と叫ばれた声は死者の中にも聞こえた。その声は墓の壁をつらぬいて、眠っている者たちに起きよと呼びかけた。キリストの声が天から聞こえるときもこれと同じである。その声は墓所をつらぬき、墓を開き、キリストのうちにある死人は起きあがるのである。救い主のよみがえりのときには少数の墓が開いたが、再臨の時にはすべての死せるとい人々がキリストの声を聞いて、輝かしい永遠の生命にはいるのである。キリストを死人の中からよみがえらせたのと同じ力が、教会をよみがえらせ、これに「すべての支配、権威、権力、権勢……また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名」にまぎって、キリストと共に栄光をさずけるのである（エペソ 1:21）。（各時代の希望下巻 318, 319）

16 章 クリスチャンの節制

クリスチャンの節制はこの地上でのわたしたちの生活のあらゆる面に関わっており、わたしたちの存在の霊的、精神的、身体的局面の間に緊密な関係があることを認識します。身体の状態は精神に影響し、精神の状態は身体ばかりでなく、神に対する霊的な関係にまで影響を及ぼします。真の節制は、有害なものをすべて完全に排除し、健康的なものを思慮深く用いることとして定義づけることができます。万事における節制に関する全般的な原則は神のみ言葉の中に概要が示されています（コリント第一 10:31; ペテロ第二 1:5-8）。

ギリシャの競技者たちからの教訓

「パウロは、こうした競走を、クリスチャンの戦いの比喩として引用し、選手が競走に勝利するために必要な準備— 準備訓練、節食、そして節制の必要— を強調した。「しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする」と彼は断言した。競走する者は、体力を弱める傾向のあるあらゆる楽しみを捨て去り、厳格な不断の訓練によって、筋肉の強さと耐久力をきたえ、いよいよ競技の日が来たならば、できる限りの力をふりしぼるのである。ましてクリスチャンの場合は、自分たちの永遠の利益がかかっているのだから、食欲と情欲を理性と神のみこころに従わせることが、どんなにか重要なことであろう。決して彼は、娯楽やぜいたくや安逸に心を奪われてはならない。彼のすべての習慣と情欲は、最も厳格な訓練の下におかれなければならない。神の言葉の教えに照らされ、聖霊の導きを受けた理性が、支配権を握らなければならない。……

パウロは、競走の勝者が受ける朽ちる花の冠と、クリスチャンの競走に勝利を得る者に与えられる永遠の栄光の冠とを比較している。「彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである」と彼は言う。ギリシアの競走者たちは、朽ちる賞を得るために、どんな苦しみも訓練もいとわなかった。われわれは、永遠の命の冠という無限に価値のある賞を得

ようと努力しているのである。それだから、われわれは、もっと注意深く努力し、もっとよろこんで犠牲と克己に励むべきではないだろうか。」(患難から栄光へ上巻 335, 336)

聖書的な視点からの健康改革

健全な思いは大いに健全な体のうちに発達するものであるから、健康改革は贖いの計画においてその役割があります(伝道の書 10:17; ヨハネ第三 2; テサロニケ第一 5:23)。神のみ言葉はわたしたちが自分の魂ばかりでなく、自分の体にもよく気をつけることを強く求めています(ローマ 12:1; コリント第一 3:16, 17; 9:25, 27)。

飲食にかかわる、またわたしたちの身体的、精神的、また霊的な健康に影響を及ぼす万事にかかわる全般的な諸原則は、神のみ言葉のうちに大要が述べられています(コリント第一 10:31)。

ちょうど右腕が体と密接につながっているように、健康改革は第三天使のメッセージの一部として緊密につながっています(黙示録 14:12; ペテロ第二 1:6 参照)(出エジプト記 15:26; 箴言 3:7, 8; 4:20-22)。

健康改革は良いものを適度に用いることと同義です。真の節制は体の組織に有害なもの、すなわち、肉の食物(魚を含む)、動物性の脂肪、調理済みの食物に添加された有害な化学製品(グルタミン酸ナトリウム等)、アルコール飲料、茶、コーヒー、カフェインを含んだ飲料、たばこ、麻薬を完全に断つことを要求します。長い一覧表を作成しても完全とは言えないため、ほんのわずかな例だけを挙げています。毎年、何百もの新しい製品が市場に出るため、各自は自分自身で拒否すべきものを見出すべきです。次にある例をご参照ください(士師記 13:4, 7; ダニエル 1:8, 12-16, 20)。

また夫婦生活の行き過ぎた行為やあらゆる形態の性的な倒錯は、神のみ言葉の中で罪として非難されています(テサロニケ第一 4:3-5; コリント第二 7:1; ローマ 1:24, 26, 27; 13:11-14; ペテロ第一 4:2, 3)。

「もし食事がもっとも単純な種類のものとなるべき時があるとすれば、それは今である。肉はわたしたちの子供たちの前に置かれるべきではない。その感化力は低俗な情欲を興奮させ、強めるものであり、道徳力を弱める傾向がある。獣脂を使わないで調理され、できるだけ自然の状態にある穀物と果物が天に移さ

れるための準備をしていると公言するすべての人の食卓に上るべきである。食事が熱っぽくなければならないほど、情欲は抑制しやすくなる。身体的、知的、あるいは道徳的健康に関係なく、嗜好を満足させようとしてはならない。」(教会への証 2 巻 352)

「神はご自分の民が、肉と霊の一切の汚れから自分を清め、神を恐れて全く清くなるように求めておられる。この働きに無関心であり、これから逃れ、自分でするように神が要求しておられることを、神にしてもらおうと待っている者は、神の御旨を実行しようとしてきた謙遜な人々が、エホバの怒りの日に隠されるとき、自分の欠けていたことが分かるのである。」(食事と食物に関する勧告 29)

「清い責任ある地位についた者はみな、きびしく節制を守って頭脳を明せきにして善悪を区別し、原則に堅く立ち、公正を行ない、あわれみの心を持つ知恵がなければならなかった。それと同じ義務が、キリストに従うひとりひとりに負わされている。使徒ペテロは、『あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である』と声明している(ペテロ第一 2:9)。われわれは創造主に喜ばれる礼拝をささげることができるように、あらゆる力をできるだけ最善の状態に保つことを神から求められている。」(人類のあけぼの上巻 428)

「神のご要求に厳格に従うことは、心身の健康に有益である。道徳と知恵の最高の標準に到達するためには神から知恵と力を求め、すべての生活習慣において厳格な節制を守らなければならない。」(食事と食物に関する勧告 28)

「わたしたちは節制と健康改革を聖書的な見地から提示し、また唐突に健康改革を採用することによって極端になることがないように、非常に注意したいのである。自分たちの独特な無理のある考えに従って、健康改革を誤った根に接ぎ、またそこにわたしたち自身の強い品性の特質を織り込み、それらを神の声とし、自分たちが見るように見ないすべての人々に裁きを下すようなことがないように気をつけようではないか。」(エルクテッド・メッセージ 3 巻 284, 285)

「健康改革は人々を主の来臨にふさわしいものとするための偉大な働きの一分野である。それは手が体に密接につながっているように、第三天使のメッセージと密接につながっている。十誡の律法は、人に軽く見られてきた。しかし主はこの律法の違反者たちを、先に警告のメッセージを送ることなしに罰しに来られることはない。男女は神の戒めを破ることなく、ゆがんだ食欲や情欲にふけることによって自然の法則を犯すことはできない。であるから、このお方は健康改革の

光がわたしたちの上に輝くのを許してこられた。それはわたしたちの存在そのもののうちに立ててくださった律法を犯す罪深さをわたしたちが悟ることができるためである。」(健康に関する勧告 20, 21)

「十誠の中に神はご自分の御国の律法を制定してくださった。自然の法則を犯すことは、神の律法を犯すことである。」(SDA パイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 1 卷 1105)

「身体的な自然を支配する法則は、その起源においても性質においても、十誠の法則と全く同様に神聖である。人はおそるべく、くすしく造られている。なぜなら、エホバがご自分の律法をご自分の力強い御手で、人体の各部位に記してくださったからである。

わたしたちの存在の法則を犯すことは、ちょうど十誠の一つを破ることと全く同様に罪である。なぜなら、わたしたちはいずれも神の律法を犯さずにそうすることはできないからである。

自分の身体的な命と健康に関わる習慣や慣習に不注意で無頓着な人間は、神に対して罪を犯すのである。

これらの律法を犯すことは不朽の神の律法を犯すことであり、確かに刑罰をもたらすのである。」(健やかな生き方 21)

クリスチャンの節制は、わたしたちの生活様式と安寧全体に関わります。この主題について、わたしたちは次の書物を読むことをお勧めします。ミニストリー・オブ・ヒーリング (The Ministry of Healing)、健康に関する勧告 (Counsels on Health)、食事と食物に関する勧告 (Counsels on Diet and Foods)、節制 (Temperance)、クリスチャンの節制と聖書の衛生 (Christian Temperance and Bible Hygiene)、健やかな生き方 (Healthful Living)。

今日のわたしの生涯

My Life Today



7月「社会生活」

社会関係における模範イエス

「三日目にガリラヤのカナに婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれた。」(ヨハネ 2:1, 2)

ガリラヤのカナで婚礼があつた。この婚礼の当事者はヨセフとマリヤの親戚であつた。キリストはこの家族の集まりと、影響力のある人がたくさんそこに集うことを知つて、新しくご自分の弟子となつた人々と共にカナへ向かわれた。イエスがカナに来られたことが知れるとすぐに、特別の招待状がイエスとその同行者たちに送られた。……

イエスは、婚宴に集まつたあらゆる階級の人と交わり、世的な軽率さの影響がご自分の品行を損なわない間は、ご自分のご臨在でその社交的な集まりを清められた。

ここに、いつの時代においてもキリストの弟子にとって教訓がある。彼らはすべての社交的な交わりを拒否したり、厳格に自分の同胞仲間からの隔絶を求めたりすることによって、自らを社会から除外してはならない。あらゆる階級の人々に接するために、わたしたちは彼らのいるところで彼らに会わなければならない。なぜなら、その人々は自発的にわたしたちを求めることはめつたにないからである。講壇からのみ、男女の心に神聖な真理がふれるわけではない。キリストは彼らの益を願うお方として、彼らの中に入るにより、彼らの関心を起こされた。このお方は、彼らが日々の作業をしている中で彼らを捜し求め、彼らのこの世の仕事に、みせかけではない関心を示された。キリストは、人々の家庭内において、家族全体がご自分の感化のもとにいられるよう、実生活の教訓を教えられた。

イエスは、不節制、放縦、愚行を譴責されたが、本来社交的な方であつた。貧しい者や苦しんでいる人との食事への招待を受けるだけでなく、学識のある人や身分の高い人々との会食への招待も受けられた。……このお方は浪費や歓楽の場所は認可されなかったが、害のない幸福は喜ばれた。ユダヤ人の結婚は厳粛で印象的な行事であり、人の子を不快にさせることのない喜びとうれしさがあつた。(サイズ・オブ・タイムズ 1877 年 11 月 22 日)

キリストが愛されたように人々を愛する

「わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハネ 15:12)

キリストはご自身の尊い教えをご自分の生涯で実践された。この方はご自分の熱心さによって、感情的になるようなことは決してなかった。頑迷さのない一貫性、弱さのない慈悲深さ、感傷的ではない優しさと思ひやりを示された。キリストは非常に社交的であられたが、不当な親しさを助長することのない控えめな威厳をもっておられた。このお方の節制は決して偏狭な行為や厳しさへと導くことはなかった。キリストはこの世に順応されなかったが、人々の中のわずかの欠乏にも無関心ではなく、すべての人の必要に気づいておられた。(原稿 132、1902 年)

非常に幼いときから大人になるまで、キリストはへりくだりと勤勉、そして従順の完全な型としての生活を送られた。常に考え深く、他の人のことを考え、自己を否定された。仕えられるためではなく、仕えるためという天のしるしを身に おびてこられた。……

キリストの無私の生涯はすべての者にとっての模範である。このお方の品性は、わたしたちがこの方のみ足の跡に踏み従うなら、形造ることのできる品性の型である。(原稿 108、1903 年)

機転と良い判断力は働き人の有用性を百倍にも増す。もしその人が正しい言葉を正しいときに語り、正しい精神を示すなら、これはその人が助けようとして いる人の心を溶かす力を及ぼす。(福音宣伝者 119)

信仰と教理が異なる人々は親切に取り扱うべきである。この人々はキリストの財産であるから、わたしたちは最後の精算をする大いなる日にこの人々と会わ なければならない。わたしたちは審判で互いに顔を合わせ、自分たちの思想、言葉、 行為の記録を、わたしたちが見たようにではなく、ありのままに見る。神は、キリス トがわたしたちを愛されたように、互いに愛することを義務としてわたしたちに 命じておられる。(ユース・インストラクター 1897 年 12 月 9 日)

友も敵も同様に愛する

『この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか』。彼が言った、『その人に慈悲深い行いをした人です』。そこでイエスは言われた、『あなたも行って同じようにしなさい』。(ルカ 10:36, 37)

キリストは、いっさいの隔ての壁をこわすためにおいでになった。彼は、神の憐みと愛の賜物が、空気や光や、また地を爽快にする雨のように、制限されるべきでないことを示すためにおいでになったのである。……彼は隣人も旅人も、友も敵も区別なさらなかった。……彼は、どんな人間も無価値な者として見過ごしにすることなく、……どんな人々の間にあっても、そのときの事情に適切な教訓をお与えになった。人間同士が示すあらゆる冷淡さや侮辱は、ただ彼に、神および人としてのキリストの同情を彼らが要していると感じさせるだけであった。彼は最も粗野な絶望的な人々にも、彼らがきずなくけがれなき者となり、神の子らしい品性に到達しようとの確証を与えて、望みをおこさせようと努力なさった。

彼は、しばしばサタンの自由にされて墮落し、そのわなからぬけ出る力のない人々にお会いになった。このように失望し、病気にかかり、あるいは誘惑され、墮落した人たちに、キリストは、非常にやさしいあわれみの言葉をおかけになったが、それは彼らが最も必要としたよく理解できる言葉であった。彼はまた魂の敵と一騎打ちをしている人々にもお会いになったが、これらの人々には……勝てると保証なされて、忍耐するように励まされた。……

その同情と親切なまじわりは、彼が人間の真価を認めておられることを示したので、彼は取税人の食卓に名誉の客として招かれた。そして人々は自分たちも信頼に足る者になりたいと思った。……

彼はユダヤ人だったが、サマリヤ人と自由にまじわり、……サマリヤの屋根の下で共に眠り、その手でつくられ、出された食物を共に召しあがった。また彼らの町で教え、できるかぎり親切にいていねいに彼らを扱われた。そして人間的な同情のきずなで、彼らの心をご自分にひきつけると共に、天来の恩恵によってユダヤ人の拒否した救いを、彼らにもたらされたのである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 8～10)

すべての人に同情する

「弱い人には弱い者になった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人ようになった。なんとかして幾人かを救うためである。」(コリント第一 9:22)

すべての者は、どのようにすれば自分が最も有用な者になれるか、またどのようにすれば自分が交際する人々にとって祝福となることができるかを、注意深く研究しなければならない。

神の子であると公言するすべての者は、たえず自分が伝道者であることを心にとどめ、自分の働きの中にあらゆる階級の人々の思いとのつながりを持ち込むべきである。自分の同胞を扱うにあたり誠実でない人がいるであろう。貴族的な人もいれば、虚栄心の強い者、誇り高い人、軽薄な人、独立心の旺盛な人、つぶやく人、落胆している人、失望している人、狂信的な人、自己中心的な人、臆病で傷つきやすい人、知性において高尚な人、礼儀正しい人、放蕩にふける人、無礼な人、思慮の浅い人がいるであろう。……この人々のさまざまな思いを同じように取り扱うことはできない。けれどもその人々が金持ちであろうと貧乏であろうと、また地位が高くても低くても、扶養家族であろうと独立した人であろうと、親切、思いやり、真理そして愛を必要としている。わたしたちの思いは、相互の接触によって磨かれ、精錬されるべきである。わたしたちは互いに依存しており、人類愛というひもで、共に密接に結ばれている。

キリスト教が世と接触するのは社会のつながりを通じてである。キリストの愛を味わい、神の光を心に受け入れた男女はみな、より良い道に気づいていない人々の道に光を注ぐようにと神は命じておられる。……

わたしたちは、人々が聖潔の美に魅了されるまで、キリストの柔和とへりくだりと愛を自分たちの品性の内にあらわしながら、キリストを公けにまた勇敢に告白しなければならない。(原稿 59、1897 年)

キリストのみたまによってきよめられた社交の力は、救い主に人を導くのに利用されなければならない。……キリストを心のうちに宿し、泉のように永遠の生命にまでそれを、ふきあふれさせ、接するすべての人を生きかえらすようではない。 (ミストリー・オブ・ヒーリング 481, 482)

おりにかなって語る言葉はなんと心地よいことか

「おりにかなって語る言葉は、銀の彫り物に金のりんごをはめたようだ。」(箴言 25:11)

宴会で、キリストは会話を統制し、多くの尊い教訓をお与えになった。出席していた人々はキリストのみ言葉に耳を傾けた。なぜなら、このお方は病気をいやし、悲しんでいる者を慰め、自分たちの子供をその腕に抱いて下さらなかっただろうか。取税人や罪人はキリストに引き寄せられたので、このお方が語られたとき、彼らの注意はキリストにくぎ付けにされた。

キリストは弟子たちに、他の人々の集まりの中にいるときに、どのように自分を律するかを教えられた。真の社会生活における義務と規則は、神の王国の律法に対する義務と規則と同じであることを弟子たちに示された。どのような公けの集まりに出席しても、言うべきことに事欠く必要はないことを、模範によって弟子たちにお教えになった。宴会でのキリストの会話は、過去におけるどの宴会で聞こえていたものとも、この上なくはっきりと異なっていた。キリストが口に出されたすべての言葉は、生命から生命に至る香りであった。はっきりとまた単純に語られ、そのみ言葉は銀の彫り物に金のりんごをはめたようであった。(ビュー・アード・アラド 1900 年 10 月 2 日)

キリストとの交わり—なんと口に言い表わしがたいほど尊いことであろうか。そのような交わりが、わたしたちの楽しむことのできる特権である。……初めの弟子たちがキリストのみ言葉を聞いたとき、彼らはこのお方を必要としていると感じた。彼らはこのお方を求め、見出し、このお方に従った。彼らは家の中でも、食卓でも、私室でも、野原でもキリストと共にいた。教師と共にいる生徒のように、このお方と共にいて、その唇から聖なる真理についての教訓を日々受け続けたのであった。彼らはしもべが主人を見るように、このお方を見ていた。……彼らはこのお方に快活に喜んで仕えたのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1885 年 9 月 10 日)

わたしたちの交わりは非常に重要性を伴っている。わたしたちは心地よく有益な交わりを多く形成することができるかもしれないが、有限な人間が無限の神とのつながりに入れられることほど尊いことは他にはない。このように結びついたとき、キリストのみ言葉がわたしたちの内に宿る。……その結果は純潔にされた心、慎重な生活、欠陥のない品性となる。しかしわたしたちが、欠点のない模範であられるキリストのようになることができるのは、このお方を知り、このお方と交わることによってのみである。(同上 1885 年 9 月 10 日)

真の洗練

「だれをもそしらず、争わず、寛容であって、すべての人に対してどこまでも柔和な態度を示すべきことを、思い出させなさい。」(テトス 3:2)

真の礼節の神髄は他人のことを思いやることの中にある。本質的で永続的な教育とは、同情心を広くし、博愛心を助長する教育である。少年少女たちが親を尊敬しなかったり、その美德を認めることができなかったり、その欠点を忍ぶことができなかったり、その必要に役立つことができなかったり、あるいはまた幼い者や老人や不幸な人々に対して思いやり深く、優しく、寛大で、助けることができなかったり、すべての人に対して礼儀正しくなれないようなら、そのいわゆる教養は失敗である。

真に洗練された思想と態度は、ある決まった規則を守ることよりも、むしろ天来の教師であるイエスの学校でこそよりよく学ぶことができる。心がイエスの愛によって満たされるとき、品性みがみがかれ、それはキリストの品性に似て形造られる。この教育は天来の品位と礼節心をあたえる。そこには流行社会のうわべばかりの洗練さとはくらべものにならない美しい気風と優しい態度が生まれる。

聖書には礼節が命じられている。そこには真の礼節の特性である無我の精神と柔和な態度と人をひきつける性質について、多くの実例が与えられている。それらはしかしキリストのご品性の反映にすぎない。すべてこの世における真の柔和と礼節は、キリストのみ名をみとめない人々の間においてさえ、それはキリストから与えられるものである。キリストはそうした特性がご自分の子どもたちに完全に反映するようにお望みになっている。世の人々がわれわれを通してキリストの美しさを認めるようにというのがキリストのみこころである。(教育 284, 285)

ああ、救い主の毎日の生活からは、なんという柔らかな美しい光が輝き出ていることであろう。イエスの御前からは、なんという優しさがあふれていることであろう。……キリストが共に住んでくださっている人々は聖なるふんいきに包まれている。彼らの純潔という白い衣は、主の園のかぐわしいかおりがする。(青年への使命 422)

クリスチャンの礼節

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハネ 13:34)

礼節の価値についてはあまり認識されていない。本心は親切でありながら、態度に親切さの欠けている人が少なくない。誠実と正直さを人から尊敬されながら、悲しいことに温和の欠けている人が少なくない。この欠陥は本人自身の幸福を妨げ、また他人に対する奉仕を害している。人生の最も楽しいそして最も有益な生活が、ただ思慮がたりないばかりに、非礼の犠牲にされてしまうのである。(教育 283)

聖書はわたしたちに真の礼節を実践するきわだった模範を与えている。アブラハムは神の人であった。彼が天幕を張ると、ただちに犠牲を捧げるために祭壇を築き、自分と共に宿つてくださるようにと神に請うた。アブラハムは礼儀正しい人であった。彼の生涯は、自己中心で損なわれたところがなく、神の御目に憎むべき不快な品性は何もなかった。ロトと別れる時の彼のふるまいを見なさい。ロトは自分の甥であり、自分よりもはるかに若かったので、初めに土地を選ぶ権利は自分にあったが、礼節によりアブラハムは自分の権利を自発的に控え、ロトが、その目に最も望ましいと思える地を自分の物として選ぶのを許した。昼の暑いところに三人の旅人を招き入れて、その人々の必要を満たすために急いだアブラハムを見なさい。またサラを葬るための場所を買い求めるためにヘテの子らとの取り引きで契約した時のアブラハムをよく見なさい。彼は悲しみの中でも礼節を忘れることはなかった。彼は神の貴族であったけれども、この人々の前に身をかがめたのである。アブラハムは何が本当の礼儀正しきであり、何故人からその同胞へ当然支払われるべきであるかを知っていた。(ビュー・アズ・ハルド 1885年9月8日)

わたしたちは自己を忘れて、……他の人々を元気づけ、優しい親切な行動と愛のささやかな行為によって、その人々の悲しみや重荷を軽くし、取り除くための機会を見張っているべきである。わたしたちの家族の中で始まるこれらの思慮深い礼節は、家族の外へと広がり、人生の幸福全体を作り上げる助けとなる。(教会への証 3 巻 539, 540)

他人への思いやり

「最後に言う。あなたがたは皆、心をひとつにし、同情し合い、兄弟愛をもち、あわれみ深くあり、謙虚でありなさい。」(ペテロ第一 3:8)

大使徒パウロは義務と原則に関わることには堅固であつた。彼はキリストのことを非常に大胆に説教したが、決して辛辣でも無作法でもなかった。パウロは優しい心の持ち主であり、他の人に対していつも親切で思いやりがあつた。礼節が彼の品性のきわだった特徴であり、これが彼に上流階級の人々に近づく機会を与えた。……

パウロは真理のために熱心であり、キリストを掲げることに大胆であつたが、礼儀正しい態度と真の思いやりという徳が彼の品行すべてにきわだっていた。……

パウロが行くところはどこでも温かい心にふれた。彼の魂は兄弟の魂に結びついており、その人々と別れる時には、その人々が再び自分に会うことはないということを経験に知らせ、また納得させて別れたが、その時、彼らは悲しみに満たされ、「あなたがたは、泣いたり、わたしの心をくじいたりして、いったい、どうしようとするのか」とパウロが叫ぶほどに、もっと自分たちの所に留まって欲しいと、非常に熱心に嘆願した。この最後の別れの時に、パウロの思いやりにあふれた心は、自ら彼らの悲しみを感じてあかしたように、張り裂けそうであつた。この人々はパウロを愛し、自分たちが彼のことをあきらめることはできないと感じた。どのようなクリスチャンでもパウロの品性に敬服しないことがあろうか。真理を守るためには岩のように堅く立ち、友に囲まれている時は子供のように愛情深く、優しくあつた。……

最もキリストに似た信仰の告白者は、最も親切で憐れみ深く、礼儀正しい人である。彼らの信念は堅固でその品性は強い。何者も彼らをその信仰からそらしたり、その義務から離れさせることはできない。

クリスチャンは柔和で穏やかな精神を養う。彼はもの静かで他の人々を思いやり、病気によって短気になったり、天候や状況がかき乱すことのない、幸福な気質の持ち主である。……神の子らは善を行うことを決して忘れない。……良い働きは進んで行く。なぜなら神がご自分の恵みによって彼らの性質を変えられたからである。(ビュー・アズ・ヘルド 1885 年 9 月 8 日)

もてなし

「不平を言わずに、互にもてなし合いなさい。あなたがたは、それぞれ賜物をいただいているのだから、神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互のために役立てるべきである。」（ペテロ第一 4:9, 10）

親切なもてなしの精神がなくなるとき、心は利己心で麻痺してしまう。（原稿 41、1903 年）

「旅人をもてなす」者は、教会の中で責任を負うべき人の特徴として、聖霊によって与えられた指示に含まれている。そして教会全体に対しては、「不平を言わずに互にもてなし合いなさい……」との命令が与えられている（ペテロ第一 4:9、10）。

これらの忠告は不思議なほど無視されてきた。クリスチャンであると公言する人々の間ですら、真の親切なもてなしは、ほとんど実践されていない。わたしたちの民の間で親切なもてなしをあらわす機会の特権であり祝福であるが、そのようにみなされていない。ほとんどまったくといっていいほど社交性がなく、当惑やひけらかしを感じずに、家族の食卓に二、三人分を増やそうとする気持ちがほとんどない。ある人々は、「あまりにも大変」だと言い訳をする。もしあなたが、「特別の準備はしていませんが、わたしたちにある物で歓迎いたします」と言うなら、少しも大変ではないのである。不意の来客にとって、歓待は最も手のこんだ準備よりも、はるかにありがたいものである。……

キリストはご自分のためになされたもてなしの費用をすべて勘定しておられ、この働きのために必要なものをすべて供給して下さる。来客と自分自身の双方のために益となるよう最善を尽くしつつ、キリストのために、兄弟をもてなす人々は、特別な祝福を受ける価値のある者として天に記録される。（教会への証 6 巻 342 ～ 345）

困窮し苦しんでいるクリスチャンたちに戸を開くとき、あなたは目に見えない天使たちを迎え入れているのである。あなたは天使たちとのまじわりを招いているのである。彼らはよろこびと平和のきよい雰囲気をもってくる。彼らが口に賛美をもってやってくる時、天ではそれに応ずる歌の調べが聞かれる。愛の行為の一つ一つに天では音楽がかなでられる。天父はそのみ座から、無我の働き人をご自分の最もとうとい宝にかぞえられる。（各時代の希望下巻 110）

快活さ

「慈善をする者は快く慈善をすべきである。」(ローマ12:8)

あなたは、自分自身を快活にし、あなたの周りにいる人をすべて幸福にすることが最高の喜びとなるまで、あなたの感情の中に無我の精神を養い、実践する義務がある。……

思慮のある快活さはクリスチャンの恵みの一つである。(教会への証 4 巻 62)

日常生活の当惑や心配事に、あなたの思いを悩ませ、あなたの眉をくもらせることを許してはならない。もしあなたがそれをするなら、あなたは常に何かに当惑し、悩むことになる。生涯はわたしたちが作るものであり、わたしたちは探すものを見出すのである。もしわたしたちが悲しみと苦勞を探し求めるなら、またささいな困難を拡大する気分に入るなら、わたしたちは自分の思考と会話を奪うそれらのことをたくさん見出すであろう。しかし、もしわたしたちが物事の明るい面を見るなら、わたしたちは、自分を快活にまた幸福にするものを充分見出す。わたしたちがほほえむなら、ほほえみはわたしたちに帰ってくる。わたしたちが気持ちのよい、楽しい言葉を語るなら、その言葉は再びわたしたちに向かって語られる。(サイン・オブ・タイムズ 1885 年 2 月 12 日)

人を一方の極端からもう一方の極端へと押しやるのはサタンが注意深く研究した計画である。神は、わたしたちが光の子として快活で幸福な精神を養い、自分たちを暗闇から驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、わたしたちが語り伝えることができることを望んでおられる。

あなたは地下室に入りなさい。そうすれば、その暗さについて十分に語り、「わたしは見ることができない、見ることができない」と言うことができるであろう。しかし、光が輝いている二階に上つてきなさい。暗闇の中にいる必要はないのである。キリストがおられるところに上つてきなさい。そうすればあなたは光を持つ。(オーストラリア・ユニオン・コンファレンス・レコード 1904 年 11 月 1 日)

熱心なクリスチャンはキリストを見習おうと努める。なぜならクリスチャンであるということはキリストのようであるということだからである。……イエスのための心から喜んで行ふ奉仕は明るい陽光に満ちた宗教を生み出す。……キリストの内には絶えることのない光と平安と喜びがある。(原稿 1、1867 年)

親切な言葉

「主なる神は教をうけた者の舌をわたしに与えて、疲れた者を言葉をもって助けることを知らせ、また朝ごとにさまし、わたしの耳をさまして、教をうけた者のように聞かせられる。」(イザヤ 50:4)

キリストがわたしたちに宿っておられるなら、外にいるときと同じく家庭でもわたしたちはクリスチャンである。クリスチャンという人は自分の親戚や交際する人々に親切な言葉を語る。彼は親切で礼儀正しく、愛情に満ちており、思いやりがあって、天の家族にふさわしくなると自分自身を教育し続ける。もし彼が王家の一員であるなら、自分が行こうとしている王国を代表する。彼は子供たちに優しく話す。なぜなら彼は、子供たちも神の相続人であり、天の宮廷の一員であることを悟っているからである。神の子らの中には、無情は宿らない。(レ・ユー・ア・ヴ・ヘルト 1892 年 9 月 20 日)

ある人々はわずけと言い、そっけなく粗野であることを誇り、これを率直と呼ぶ。しかし、それは正しく言い表わされていない。それは最も濃く染まっている利己心である。(同上 1884 年 4 月 29 日)

キリストは常に穏やかで威厳があり、このお方と共に働く人々は、自分たちの働きに恵みの油を用いる。彼らの言葉と行動は気持ちを落ち着かせるものとなる。(同上 1899 年 7 月 11 日)

わたしたちは魂を憐れみ深く、優しく親切で、許しと思ひやりに満ちたものに教育しなければならない。わたしたちは虚栄心や、愚かな言葉、冗談や軽口をすべて捨て去ると同時に、冷たく、同情心のない、非社交的な者になるべきではない。あなたが神の園にある香りのよい花のようになるまで、主の御霊はあなたの上に宿らなければならない。あなたが力から力へと進み、イエスの尊いかたちをますます反映しながら、栄光から栄光へと、品性から品性へと変えられるまで、光であり、義の太陽であるイエスについて語り続けなければならない。(同上 1892 年 9 月 20 日)

キリストはいつもご自分の富を分け与える用意ができておられるので、わたしたちはこのお方のところからくる宝石を集めておくべきである。それは、わたしたちが語るとき、これらの宝石がわたしたちの唇からこぼれるためである。(教会への証 6 巻 174)

子供は母親との交わりを愛する

「その子らは立ち上がって彼女を祝し、その夫もまた彼女をほめたたえて言う」
(箴言 31:28)

家庭は子供にとって世界中で最も魅力的な場所であり、母親の存在は最大の魅力であるべきである。子供は敏感な愛の性質を持っている。たやすく喜ばせることもでき、不快にさせることもできる。……

幼い子供は人と交わることを好み、ひとりで楽しむことはまれである。彼らは同情と優しさを慕い、自分が楽しいことは母親も喜ぶものと思う。……

子供の騒がしい音で悩まされないため、またはその小さい数々の要求に妨げられまいとして、子供を追いやりつけないで、母親は子供の遊びを計画したり、活動的に手や頭を使う軽い仕事を考えるべきである。子供と同じ気持ちになってその遊びや仕事を導くと、そこで母親は子供の信頼を得る。……忍耐強く、注意深い愛によって母親は子供の心を正しい方向に向けることができ、美しい感じのいい性質を養うことができる。

母親は子供を依頼心の強い、自己中心の者に育てないように警戒すべきで、子供に自分がすべての中心で、他のことはみな自分を中心にして運行されねばならないと思わせたりしてはならない。ある親は子供を遊ばせるために多くの時間を費し、手段を尽すが、子供が自分の才能や技術を働かして、自分で遊ぶように訓練しなければならない。そうすると、非常に単純な楽しみで満足するようになる。また子供が小さい失望や試練に勇敢に耐えるように教えるべきである。……他人に対して子供が思いやり深い者となれるように、母親は研究をして、各種の方法をすすめるべきである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 358,359)

わたしたちは神のみ言葉の中に、家庭とこれを統轄する婦人についての美しい描写を見出す。「その子らは立ち上がって彼女を祝し、その夫もまた彼女をほめたたえて言う」(箴言 31:28)。(健康改革者 1877 年 12 月 6 日)

父の心をその子供たちに向けさせ

「彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。」
(マラキ 4:6)

父親がその日の仕事から帰ってくるとき、彼は自分の心配ごとを家庭に持ち込まない。彼は、家庭と家族の輪は、不幸な困惑で損なわれるには、あまりにも神聖であると感じる。彼が家を出るとき、彼は自分の救い主と自分の宗教を後に残しては行かなかった。どちらも彼の同行者であった。彼の家庭の美しい感化、彼の妻の祝福、そして子供たちの愛は彼の重荷を軽くし、彼は心に平安をもって、彼の帰りを迎えようと喜んで待っている妻と子供たちに、快活で励ましにみちた言葉をたずさえて帰ってくる。(ビュー・アンド・ヘラルド 1899 年 8 月 8 日)

父親は子供たちと共にいくらかの時間を過ごすことに、心楽しい変化を見出すべきである。子供たちを庭に連れていき、開きかけているつばみや咲きほこっている花々のさまざまな色合いを見せることができる。……神がこれほどまでに木や花を心に掛けて下さっているからには、ご自分のかたちに造られた被造物に対してもっと心に掛けて下さるという事実を、子供たちの心に印象づけることができる。神は、子供たちが人工的な飾りではなく、子供たちの心を喜びと幸福にはずませる品性の美しさや、親切と深い愛情からくる魅力で、この子たちが愛らしくなることを神が望んでおられることを、小さい時から理解するよう導くことができる。(サインズ・オブ・タイムズ 1877 年 12 月 6 日)

もし軽薄な者や快楽を求める者が、自分たちの思いを、本当のもの、真実なものに集中することに同意するなら、その心は自然を造られた神への崇敬の念に満たされざるを得ず、彼らは自然の神をあがめる。(ユース・インストラクター 1897 年 5 月 6 日)

あなたの子供たちをイエスに引き寄せたいのなら、あなたは、怒った言葉を出したり、眉をしかめて家の中に入ってはならない。あなたが仕事から疲れはてて帰ってくるのなら、ただ神に恵みと安らぎを与える御霊を願い求めなさい。そうすればあなたの心は優しく和らげられ、あなたの唇は親切と慰めの言葉で満たされるであろう。子供たちの心をあなたに結びつけなさい。あなたの宗教をその好ましきによって子供たちに勧めなさい。(サインズ・オブ・タイムズ 1892 年 2 月 22 日)

幸福な互いの交わり

「われらはたがいに楽しく語らい、つれだって神の宮に上りました。」(詩篇 55:14)

子供たちの周りに家庭とあなたの交わりの魅力を投げかけなさい。もしあなたがこうするなら、子供たちは、同世代の若者と付きあうことをそれほど欲しないであろう。……現代、世界にある悪のゆえに、また子供たちに制限をもうける必要があるために、両親は子供たちを自分の心に結びつけ、自分たちが子供たちを幸福にしたいと願っていることを子供たちに分らせるために、倍の心配りをしなければならない。(教会への証 1 卷 388)

両親は家族のために夕べを捧げなさい。その日の仕事に伴った心配事や困惑を話題にせず、……夕べをできるかぎり楽しく過ごしなさい。(クリスチャンの節制と聖書の衛生 65)

家族の一人一人がその日のさまざまな気苦勞を中断し、学びで一致する家庭における聖書を学ぶ集まりを作りなさい。父母兄弟姉妹がこの働きに心からとりかかり、家庭の教会が大いに発展するかどうかを見なさい。……あなたがたに真の知識を与える読み物を読めば、家族全体の助けとなるであろう。(レ्यू・アノ・ハルド 1902 年 7 月 29 日)

子供たちを自分に近く引きよせ、彼らを愛していることを示して、彼らの努力すべてに、それがスポーツであつても関心をもっていることを示し、ときには子供たちの中の一人であるかのようにふるまうなら、両親は子供たちを非常に幸福にし、彼らの愛を自分のものとし、子供たちの信頼を勝ち取るのである。(クリスチャン教育の基礎 18)

真の家庭における賢明で愛情のある指導のもとに育った子供は快樂や友人を求めてさまよい出る気持ちを持たない。罪惡も子供の心をひかず、家庭にみなぎる精神がその品性を形成し、子供が家庭を出て、社会にたつとき、誘惑に対して強い防御となる習慣をつくり、道義を築くのである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 363)

真の心は思いやりにふれると反応が速い。(クリスチャン教育の基礎 58)

愛情によって家族が団結

「あしたに、あなたのいつくしみをあらわし、夜な夜な、あなたのまことをあらわしなさい。(詩篇 92:2)

キリストの宗教は、身分の高い者へも低い者へも、富める者にも貧しい者にも、幸福な者にも圧迫されている者にもできるかぎりの善をすべて行うようにと、わたしたちを導く。しかし特に、わたしたち自身の家族の中で優しいふるまいをするようにと導く。父や母、夫や妻また子供に対する礼儀正しく愛に満ちた行動によってキリストの宗教があらわされる。わたしたちはイエスを見つめ、このお方の御霊を捕え、このお方の善と愛の光のうちに生き、他の人々にイエスの栄光を反映しなければならない。(原稿 18、1891 年)

血縁というきずなで結ばれている人々は互いに最も強い正当な権利がある。互いの交わりの中で、彼らは親切心と最も優しい愛をあらわすべきである。(サイン・オブ・タイムズ 1898 年 9 月 1 日)

優しい態度と快活な会話、また愛の行為は、愛情という絹のひもで子供たちの心を両親に結びつけ、金銭で買うことのできる最も珍しい装飾品よりも、家庭を魅力的にする。(同上 1884 年 10 月 2 日)

お互いの親切心と寛容は家庭を楽園にし、その家族の輪の中に聖天使を引き入れる。しかし、天使たちは、感じのよくない言葉や、不満、また争いのある家庭からは逃げて行く。(同上 1884 年 4 月 14 日)

社会や家族との交わりにとって最も価値のある法則は聖書の中に見出すべきである。……救い主の山上の垂訓は年配の者にも若者にも価値のつけられないほどの価値ある教訓を含んでいる。この垂訓は家族の中でたびたび読み、その尊い教えが日々の生活の中で良い例となるべきである。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」という黄金律が……家族の律法となるべきである。キリストの精神を大切に人々は家庭で思いやりを示す。……彼らは他の人々に親切な配慮をすることで自己を忘れて、自分の周りの人々をみな幸福にしようとたえず努力する。(同上 1886 年 7 月 1 日)

クリスチャンの礼儀正しさは、日々ますます密接に、また強くなりながら、家族の一人一人を愛のきずなで一つにする金の留め金である。(健康改革者 1877 年 8 月)

家庭を他の人々にとって祝福とする

「むしろ、宴会を催す場合には、貧乏人、不具者、足なえ、盲人などを招くがよい。そうすれば、彼らは返礼ができないから、……正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう。」(ルカ 14:13, 14)

神は、「わたしとわたしの家族」のために、非常にしばしば示される利己的な関心を喜ばれない。この精神を心に抱いているどの家族も、キリストの生涯にあらわされた純潔な原則によって改心する必要がある。自分たちの中で閉じ込もっている人々、訪問客を快くもてなそうとしない人々は多くの祝福を失う。(教会への証 6 巻 344)

多くの人々のために、わたしたちの家庭を祝福とすることができる。わたしたちの社交的な接待は、社会の習慣に左右されることなく、かえってキリストの精神とそのみ言葉に従ってなすべきである。イスラエル人はいつも祭日に貧しい人、旅人、レビ人、すなわち聖所において祭司の助けであり、また宗教教師、伝道師であった者を家に迎え入れた。これらの人は客とみなされ、社交的および宗教的なすべての祝いに、いつもその接待を受け、病気のとき、困ったときには優しくいたわられた。わたしたちが自分の家庭に歓迎すべき人もこういう人でなければならない。こうした歓迎がどれほど伝道にたずさわっている看護婦や教師、あるいは苦労をなめ、働き疲れた母親、または家もなく、貧困と多くの失望にあって戦っている弱い年寄たちを喜ばせ、励ますことであろう。……

親切なあなたかい観迎をし、時に炉辺にすわり、また家族の食卓に招いて祈りの祝福を共にすることが、こうした人々にとっては天国のように感じられるのである。

わたしたちの同情は自分や家庭のわくからあふれ出なければならない。自分の家庭を開いて他人の祝福とする人には尊い機会がある。社交によって及ぼす力は驚くばかり力強いものであって、周囲の人を助ける手段としようとするとき、それを用いることができる。……

この世でのわたしたちの時は短く、しかもこの世は一度しか通ることができない。この世にある間、最も高い人生を送るべきである。(ミニストリー・オブ・ヒーリング 326～328)

家庭は青年の避難所であるべき

「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。」(マルコ 9:37)

わたしたちの家は誘惑にあった青年の避難所でなければならない。道の分かれ目に立っている人が多い。一つ一つの感化、印象が現在および今後の運命をどういうふうに形成していくかを決定する。(ミストリー・オブ・ヒーリング 327)

彼らから遠ざかるのではなく、近寄りなさい。彼らをあなたの家の炉辺に連れてきて、あなたの家庭の祭壇へ招待しなさい。彼らのために成し遂げるべき働きがたくさんある。サタンの庭にあるどの木も魅力的で、毒を含んだ実をならせ、それを取って食べる一人一人に苦悩が宣告される。(レヴィ・アンド・ヘルト 1885 年 11月10日)

悪が彼らを招いており、悪の場所は光に輝いていて魅力的で、入ってくる者はだれでも歓迎する。わたしたちの周囲には家庭のない青年、また家庭があっても、それが何の助けにもならず、向上させる力となっていない家庭の青年が多く、悪の方へ押し流されてしまうのである。彼らはわたしたちの家庭のすぐ近くで墮落におちいるのである。

こうした青年に同情の手がさしのべられなければならない。口から出た単純で親切な言葉や、ちょっとした小さい心づくしがこうした魂の上に集まっている誘惑の雲を一掃するのである。神から出た同情の真の表現は、キリストのような、かおり高い言葉とキリストの愛の精神から発する清純な優しい接触が必要である人々の心の戸を打ち開く力をもっている。もし青年に対する興味を示したいと思うなら自分の家庭に招き、喜びにあふれた有益な感化で囲みなさい。そうすれば、喜んで天国への道を踏み出す者が大ぜいある。(ミストリー・オブ・ヒーリング 327, 328)

しかし夫婦が他の人と交わらず、自分たちだけで互に愛情をかわして満足していたのでは、幸福はありえないことを記憶なさい。あらゆる機会を捕えて、周囲の人の幸福のために尽しなさい。……真の喜びは無私の奉仕の中でだけ発見できる。(同上 334)

訪問客を家庭礼拝に招く

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。」（ペテロ第一 2:9）

ある意味において父親は家族の祭司であって、家庭の祭壇に朝夕、燔祭をささげるものである。妻や子供は父とともに祈り、彼に合わせて賛美の歌を歌うべきである。朝はその日の勤めに家を出る前、父は子供を自分のまわりに集め、神のみ前にこうべをたれ、天の父の保護に子供をゆだねるべきである。一日の仕事が終ったならば、その日の神の守りを覚え、家族は感謝の祈りをともにし、賛美の声をあげなさい。……まわりに家族を集めることをやめてはならない。（ミストリー・オブ・ヒーリング 361, 362）

お客をもてなし楽しませる努力をする時に、神への義務を見過ぎしにはならない。どんなことがあっても、祈りの時間をおろそかにしてはならない。おしゃべりや遊びに疲れてしまって、みなが礼拝の時間を楽しめなくなるような事があってはならない。こういうことは、神に不完全なささげ物をすることになる。夕方早く、あわただしくなく、はっきりした頭で祈ることのできる時に、神に祈願をささげ、感謝と喜びの声をあげなければならない。

祈りの時間は、一日のうちで最も大切に、最も神聖で、そして最も楽しい時間であるということを、クリスチャンを訪問するすべての人に認めさせなさい。こうした礼拝の時間は、これに加わるすべての人の心を高め、洗練する効果を及ぼす。そのことによって精神に平和と感謝の思いが生れる。（青年への使命 342）

としびはどんなに小さくても、つねに燃えてさえいれば、他の多くのとしびに火を点ずるものとなれる。……もしその心と家庭を開いて神の生活方式を受け入れるならば、わたしたちは生命を与える力への水路となるであろう。わたしたちの家庭から人々をいやす川が流れ出て、荒れはてた不毛の地に生命と美と収穫をもたらすのである。（ミストリー・オブ・ヒーリング 328）

友を得るなら 友としてふさわしい者でなければならない

「友を得るなら友としてふさわしい者でなければならない。」(箴言 18:24 英語訳)

選民の教育のために備えられた道には、神を中心とする生活が完全な生活であることが明らかに示されている。神によって感じさせられた必要は、神が自ら与えてこれを満ち足らせ、神のお与えになるあらゆる才能は、神が自らこれを発達させられる。

あらゆる美の創造者であり、また美しいものを愛される神は、神の子どもたちに、美を愛する心を満足させる道を備えられた。神はまた彼らの社交上の必要のために、すなわち同情心を養い、生活を明るく楽しくするのに大いに役立つところの親切で人助けとなる交際のために、方法を講じられた。(教育 35)

神の民は全体的に見て、ほとんどクリスチャンの社交性を養っていない。……知り合いは社交的な交わりによって親しくなり、友情関係を通して心の一致と神の御目に喜ばれる愛の雰囲気をもたらす。(教会への証 6 巻 172)

だれでも気の合った友を見つけ、また作る。そして友情の強さに比例して、友人が善かあるいは悪への影響を互いに与える量も決まる。すべての人には仲間がおり、順番に影響を及ぼしたり、及ぼされたりする。

きずなは人の心を共に結ぶ神秘的なつながりであって、その結果二人の個人の感情や嗜好、また原則がぴったりと調和する。一人がもう一人の精神を捕え、その人の方法や行動を真似る。ろうが印の形をとどめるように、親しい交わりと交際によって生み出された印象が思いにとどまる。印象は無意識のものであるが、影響力の強いものである。……もしも主を畏れる人を気の合う友として選ぶなら、その影響力は真理と義務と聖潔へと導く。真のクリスチャンの生涯は神のための力である。(教会への証 4 巻 587)

真の友情のあたたかさ……は天国における喜びをこの世において味わわせるものである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 333)

義は人生をうるわしくする

「正義といつくしみを追い求める者は、命と（義と）誉とを得る。」（箴言 21:21）

社交のための集まりは、共に会う人々がその心に赤々と燃える神の愛を持っているとき、最高に有益で教訓に満ちたものとなる。彼らが神のみ言葉に関して思想を交換し、神のみ働きを前進させ、同胞に善を行うための方法を考えるために集まるときに最も有益で教訓に満ちたものとなる。これらの集まりに聖霊が喜ばしい客として招かれ、聖霊を悲しませるような言葉も行動もなければ、神はあがめられ、そこに集う人々は元気づけられ、力づけられる。……

青年の思いが救いという広大で高尚な主題で占められるとき、キリストは喜ばれる。キリストはそのようなすべての人の心を喜びと平安で満たしつつ、その心に宿る客として入られる。……この愛を持つ人々は、神がご自分を愛する者たちのために用意されたことを話すことを喜ぶ。（ユース・インストラクター 1897 年 2 月 14 日）

青年男女は、よく行われている自分たちのスポーツや夕方のパーティー、また音楽会が、キリストに受け入れられるものだと考えるべきではない。

わたしたちの集まりはすべて、はっきりと宗教的な影響力に特徴づけられていなければならないという光が、何度も繰り返しわたしに示されている。もしわたしたちの青年が聖書を読んで理解するために集まって、「わたしたちは永遠の命を持つために何をしたらよいのでしょうか」と問いつつ、自分を真理の側に結びつけるなら、主はご自分の祝福を彼らの心に入れたいと思っておられる。……

主のみ言葉は老若すべての人のためである。神の真理が思いと魂に織り込まれるようにしよう。あなたの祈りが、「ああ主よ、わたしの魂をお守りください。そうすればあなたを辱めることはありません」となるようにしなさい。（ユース・インストラクター 1906 年 8 月 14 日）

田舎で一日を過ごす

「主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。」(詩篇 23:2, 3)

町や村に住んでいる家族が何軒かまとまって、肉体的にも精神的にも重い負担のかかっている仕事から離れ、きれいな湖か、自然の景色の美しい小さな森のそばにある田舎に小旅行をしよう。簡単に衛生的な食物と最上の果物や穀物を用意し、木陰か天蓋のもとで食卓を整えなさい。乗馬や運動、また景色が食欲を刺激し、彼らは王侯もうらやむほどの食事を楽しむことができる。

そのような場合に親と子供たちは心配事や骨折り仕事、また困惑から解放され、親はすべてのことを子供たちのためにできるかぎり楽しいものにしながら、子供たちと共に子供になるべきである。その日は一日中レクリエーションのために当てよう。仕事を室内でする人や座業の人にとって、戸外での運動は健康に良い。できる人はみな、この方針を続けることは義務である。失うものは何もなく、多くのものが得られる。彼らは自分たちの働きに熱心に携わるための新しい活気と勇気をもって、自分たちの職業に戻ることができ、より病気に抵抗する備えができる。

.....

しかし、職場で仕事の責任を負っている人々のたえまない疲れさせる労働に、ほとんどの人が気づいていない。彼らは毎日毎日、何週も続けて室内に閉じこもっており、精神力にかぶさる絶え間ない緊張はたしかに彼らの体質を徐々に衰えさせ、生命力を減らしていく。……

彼らはたびたび気分転換をし、ほとんど完全に家族の交わりに恵まれていない家族と共に、しばしばレクリエーションに丸一日あてるべきである。(教会への証 1 巻 514, 515)

互いの訪問

「そのとき、主を恐れる者は互に語った。主は耳を傾けてこれを聞かれた。そして主を恐れる者、およびその名を心に留めている者のために、主の前に一つの覚え書がしるされた。『万軍の主は言われる、彼らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、わたしの宝となる。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。』」（マラキ 3:16, 17）

わたしたちには神への個人的な責務、だれもわたしたちのためにすることのできない個人的な働きがある。それは、教訓と個人的な努力、また模範によって世の中をより良くすることである。わたしたちは社交性を養うべきであるが、単なる楽しみのためではなく目的を持って行おう。救わねばならない魂がある。……他の人々との交際は節度と天来の思いで特徴づけられ、わたしたちの会話は天の事柄でなければならない。……

贖いの計画よりも思いを集中させる価値のあるものが何かあるだろうか。これは尽きることのない主題である。イエスの愛、このお方の愛を通して墮落した人間に提供された救い、心の聖潔、この終りの時代のための尊い救いの真理、イエス・キリストの恵み、これらは魂を活気づけることのできる主題であり、二人の弟子がエマオへ向かって旅をした時にイエスがあらわれて、彼らと共に歩まれた時に、彼らを感じたその喜びを感じるために、心に純潔をもたらすことのできる主題である。自分の愛情をキリストに集中している者は、この種の聖別された交際を楽しみ、そのような交際によって天来の力を集める。……神の真理が心の中に原則として宿るとき、この原則は生ける泉ようになる。試みがそれを抑えようとするかもしれないが、その泉は他の場所ではとぼしり出る。その泉はそこにあり、とどまらせることはできない。心の中にある真理は命の水源であって、疲れた者の元気を回復し、恥ずべき思想や言葉を抑え、すべてを繁茂させる。……彼らの幸福は……イエスとこのお方の愛の内……にある。（レビュー・アンド・ペラルド 1885年11月10日）

イエスとベタニヤに住む友

「イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。」(ヨハネ 11:5)

イエスがたずねて行くことを好まれた家庭がひとつあったが、それはラザロとマリヤとマルタの家庭だった。(各時代の希望中巻 334)

キリストの一番しっかりした弟子たちの中にベタニヤのラザロがいた。キリストを信じるラザロの信仰は、初めてお会いした時から強かった。キリストに対する彼の愛は深く、彼は救い主から非常に愛された。このラザロのためにキリストの最高の奇跡が行われた。救い主はご自分の助けを求めるすべての者を祝福された。主は、人類家族のすべての人を愛されるが、しかしある人々に対しては特に目だってやさしいまじわりによって結ばれておられる。イエスの心は、ベタニヤの家族に対して強い愛情のきずなで結ばれていた。そしてこの家族のひとりのために、キリストの最もふしぎなみわざがなされたのであった。

イエスはたびたびラザロの家でくつろがれた。救い主にはご自分の家庭がなかった。主は、友人や弟子たちのもてなしを受けられたが、それでもしばしば疲れて人との交わりがほしくなれると、怒っているパリサイ人たちの疑いやねたみからのがれて、このなごやかな家族のところへおいでになることをよろこばれた。ここにイエスは、心からの歓迎と、純粋でよい友情をみいだされた。イエスは、ここでは、ご自分のことばが理解され心にとめられることを知っておられたので、率直に、何の遠慮もなくお話になることができた。

救い主は、静かな家庭と、興味をもってご自分の話を聞いてくれる人たちをよろこばれた。主は人間的なやさしさ、礼儀、愛情を熱望された。主がいつも与えようとしておられる天の教えを受け入れた人たちは非常にめぐまれた。……群衆はなかなか理解しなかった。キリストは、公生涯における疲労の多い戦いからの休息をベタニヤの家でとられた。ここで主は、理解のある聞き手に神の書を聞かれた。こうして個人的にお会いになっている時に、キリストは、雑多な群衆には語ろうとされなかったことを、聞き手たちに説明された。彼はご自分の友人たちに譬で語られる必要がなかった。(各時代の希望中巻 334, 335)

パウロとテモテの友情

「愛する子テモテへ。父なる神とわたしたちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とが、あなたにあるように。……あなたに会って喜びで満たされたいと、切に願っている。」(テモテ第二 1:2～4)

ローマ皇帝の法廷から、パウロは自分の独房に帰ってきた。彼は自分がほんの一時的な執行猶予を得たことを悟った。彼は、敵が、彼の死を達成するまでは休まらないことを知っていた。しかし彼はまた、しばらくのあいだ真理が勝利したことも知っていた。……

来る日も来る日も、陰うつな独房に座り、ネロの一言で、あるいは一度うなずくだけで、自分のいのちがささげられることを知って、パウロはテモテのことを思い、彼を呼びにやろうと決めた。テモテにはエペソの教会の世話がゆだねられていた。それでパウロがローマへ最後にやって来たときにも、テモテは後に残されていたのであった。パウロとテモテは並々ならぬ深い、強い愛情で結ばれていた。テモテは改心して以来、パウロとともに骨折りと苦難を分かち合い、このふたりの間の友情はますます強く、深く、きよいものとなり、テモテは、愛し尊敬する父親に対する息子のように、年若い、やつれた使徒に対した。孤独と寂しさの中で、パウロがテモテに会いたいと願ったのも、当然であった。

最も好都合な事情のもとでも、テモテが小アジアからローマに着くには数か月かかったにちがいない。パウロは自分のいのちが不確実なことを知っていたので、テモテの会いに来るのが遅すぎることにならないかと恐れた。彼には、大きな責任がゆだねられているこの青年に与えたい、大切な勧告と教えがあった。そこで、テモテには遅れず来るよう勧める一方、パウロは、言わずに終わることのないように、死に臨んでのあかしを書いた。パウロの魂は、福音による彼の息子と、息子にゆだねられている教会への、愛情に満ちた心づかいでいっぱい、彼はテモテに、その聖なる任務を忠実に果たすことの重要性をしっかりと教えたいと思った。……パウロは、羊飼いたちが打ちのめされても、なおご自身の羊の群れの世話をなさる大牧者の保護のもとに、愛するテモテをゆだねることで手紙を終えた。(患難から栄光へ下巻 194～205)

ヨナタンとダビデ

「ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。ヨナタンは、あなたの高き所で殺された。わが兄弟ヨナタンよ、あなたのためわたしは悲しむ。あなたはわたしにとって、いとも楽しい者であった。あなたがわたしを愛するのは世の常のようでなく、女の愛にもまさっていた。」(サムエル記下 1:25, 26)

ダビデに対するヨナタンの友情は……神の摂理であって、将来のイスラエルの王の生命を救うためであった。(人類のあけぼの下巻 325)

このころ、ダビデの行く手には光明がほとんどなかったが、彼の隠れ家を知ったヨナタンが、思いがけなく訪れて来て、彼を喜ばせた。このふたりの友が互いに話し合った時間は実に貴重なものであった。彼らは、互いの経験を話し合った。ヨナタンは、ダビデを励まして言った。「恐れるにはおびません。父サウルの手はあなたに届かないでしょう。あなたはイスラエルの王となり、わたしはあなたの次となるでしょう。このことは父サウルも知っています」。彼らは、神が不思議な方法でダビデを扱っておられることを話し合い、追われる身のダビデは、非常に勇気づけられた。

「こうして彼らふたりは主の前で契約を結び、ダビデはホレシにとどまり、ヨナタンは家に帰った」。

ダビデは、ヨナタンの訪問を受けたあとで、賛美の歌をうたって自分を励ました。彼はたて琴の調べに合わせて歌った。(同上 339, 340)

生まれながらにして王位の継承者であったヨナタンは、神のご命令によって自分が退けられたことを知りながら、競争者に対して友としての愛情と忠誠を示し、自ら生命の危険を冒してまでダビデの生命をかばい父の勢力が衰えてゆく暗い時代にも父のそばからはなれず、ついには父と運命を共にしたのであった。ヨナタンの名は天にとどめられるとともに、地にあっては、無我の愛の存在と力を実証している。(教育 177)

キリストに連なるものは、愛という金の鎖によって、同胞と結ばれているのである。(キリストの実物教訓 362)

元気を回復し活気づけるレクリエーション

「あなたはいのちの道をわたしに示される。あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみがある。」(詩篇 16:11)

自分の体力と精神力を神の栄光のために用いる目的で、自分の精神を元気づけ無害なレクリエーションで体を活気づけようと努めることはクリスチャンの特権であり義務である。わたしたちのレクリエーションは無分別なうかれ騒ぎや無意味な形式のものであってはならない。わたしたちは交際する人々の益となり、彼らが高めるような、そしてクリスチャンとして自分たちにゆだねられている義務にもっと首尾よく従事するのに、自分や彼らをさらに適任者とするような方法でそれを行うことができる。……キリストの宗教は、その感化力において、励まし、高尚にするものである。それは、思慮のない冗談やしやれ、またむなしく軽薄な雑談のようなものすべてを超越している。わたしたちがレクリエーションをする時はいつでも力の聖なる源である方から新鮮な勇気と力を集めることができる。それによって、わたしたちが自分たちの生涯を純潔、真の慈しみ深さ、聖潔へと高めるのによりよく成功するためである。(レビュー・アクト・ヘラルド 1871年7月25日)

宗教が鉄の杖で自分を治める暴君であるかのように、病的な想像をしている人がいる。そのような人はたえず他人の墮落を嘆き、想像上の悪に不満をもらす。その人々の心に愛は存在せず、表情はいつも不機嫌である。彼らは青年や他の人々の無邪気な笑い声でも心が冷える。この人々はすべてのレクリエーションや楽しみは罪であると考え、思いは常に厳格で厳しい点にまで至っていなければならないと思う。これは一方の極端である。他の人々は、健康を得るために新しい楽しみと気晴らしを考案するために、思いはたえず広がり伸びていなければならないと考える。彼らは興奮に頼ることを覚え、これがないと不安になる。そのような人は真のクリスチャンではない。彼らはもう一方の極端へと進む。キリスト教の真の原則は、幸福の源、すなわち計りしれない高さ、深さ、長さ、広さをすべての人の前に開く。(教会への証 1巻 565)

自分のために生きる者はない

「わたしたちのうちだれひとり自分のために生きる者はない。」(ローマ 14:7)

青年は一般的に、尊い恩恵期間が、憐れみのうちに延ばされている間に、あたかもこの期間がすばらしい休日であるかのようにふるまい、たえず興奮を繰り返して満足するために、単に自分自身の楽しみのためにこの世に住んでいるかのようにふるまう。サタンは、彼らが世的な娯楽に幸福を見出すように、そしてこれらの娯楽は害がなく、無邪気なもので、健康にとって大切でさえあると示すために労することによって自分を正当化するように導くために特別な努力をしてきた。(教会への証 1 巻 501)

興奮と楽しい娯楽を求める気持ちは神の民、特に青年にとって誘惑であり、わなである。サタンは将来の審判の場のための厳粛な準備の働きから思いを引き離そうとたえず誘い込むものを用意している。名利を追う人を通して、サタンは、用心深くない人が世的な快樂に参加する気になるようたえず興奮状態を保っている。展覧会、講演会、世を愛する方へ導くよう計算された数えきれないほどのさまざまな気晴らしがあり、世とこのつながりを通して、信仰は弱まる。(両親、教師、生徒への勧告 325)

世的な楽しみは夢中になってしまうものであり、つかの間の喜びのために、多くの人が平安と愛、天が与える喜びを伴った天の友愛を犠牲にする。(レビュー・アンド・ハワード 1884 年 1 月 29 日)

クリスチャンは望めばいつでも持つことのできる幸福の源をたくさんもっており、どのような楽しみが法にかなない、正しいかを間違うことなく正確に言うことができる。彼らは思いをふしだらにしたり、魂を卑しくしないようなレクリエーション、後で後悔したり、悲しい気持ちになったまま、なげやりになったりすることなく、また有用な者になる道をふさぐことのないようなレクリエーションを楽しむことができる。もしも彼らが自分と共にイエスをお連れし、信心深い精神を持ち続けるなら、彼らはまったく安全である。(同上 1884 年 8 月 19 日)

わたしたちの内にいる青年は、自分への高い召しをを考えて、……自分の導く道に他の人々が従ってくることを覚えて、自分の歩む道をよく熟考すべきである。(両親、教師、生徒への勧告 535)

神はわたしたちに善きものをお与えになる

「神は、その心にかなう人に、知恵と知識と喜びとをくださる。」(伝道の書 2:26)

青年は年配の人のように平静で重々しくはできず、子供は父親のように謹厳にしてはいられない。罪深い娯楽は非難する一方、……品行を汚し、墮落させない、無邪気で利益をもたらす楽しみを備えなさい。(両親、教師、生徒への勧告 335)

レクリエーションと娯楽はちがったものである。レクリエーションは、(recreation 注・再び造るの意)というその名の示す通り、力を養い築くのに役立つ。レクリエーションによって、われわれは日常の心配や仕事から離れて、心身に生氣を回復し、新しい力をもって人生のまじめな働きにもどることができる。一方娯楽は歓楽のためであり、とかく度を過ぎしやすく、有用な働きのために必要なエネルギーを奪われ、そのため人生の真の成功の妨げとなる。(教育 246)

わたしたちは間違ったことや不自然なことを避ける一方で……純潔で気高く、高尚にする楽しみの源を供給しなければならない。(原則によって生きる 19, 20・1898 年)

わたしたちの休日は、世をお手本として過ごすべきではないが、気づかないうちに休日が過ぎ去ってもならない。……休日には……もっと危険な娯楽の代りとなる何かをしなさい。(教会への証 1 巻 514)

青少年たちにとって、自分のためだけのレクリエーションよりは、他人のためになるレクリエーションのほうがはるかに大きな祝福となる。(教育 251)

わたしたちが、休日を神に敬意をあらわす日とすることは、わたしたちにとって良いことではないだろうか。そうする時わたしたちは、自分に対する神の取り扱いについての記憶を心に思いおこすことができる。……

世間には休日がたくさんあり、人々はゲームや競馬、ギャンブル、タバコ、酒に酔うことに夢中になっている。この人々は自分がどの旗のもとに立っているかをはっきりと示す。……神の民はこのお方の豊かな祝福に対して、神に感謝するために、もっと度々聖なる集会を持つべきではないだろうか。(両親、教師、生徒への勧告 343)

善良な人々の道に歩む

「善良な人々の道に歩み、正しい人々の道を守」りなさい。(箴言 2:20 英語訳)

心と体の両方に大いに益となるレクリエーションの方法がある。啓発され、識別力のある心は、このレクリエーションから、ただ無邪気なだけではなく教育的な気晴らしや楽しみの方法をたくさん見つける。戸外でのレクリエーション、自然の中で神のみ働きを熟慮するのは最高に有益なものとなる。(教会への証 4 巻 635)

わたしたちが自分の精神を新たにし、身体を活気づけようと努めている間、最も良い目的のために、常に全力を尽すようにと神はわたしたちに要求しておられる。わたしたちは、今日ここで行い、神の栄光のためにすべてを行うように、共に交わることができる。わたしたちは、自分に委ねられている義務をもっと首尾よく果すのにふさわしくなり、わたしたちの感化力が、わたしたちの交わる人々にとってもっと益となる方法で、レクリエーションを行うことができるし、またそうすべきである。特にこのような行事の場合は、わたしたち全員が元気に励ましを受けるべきである。わたしたちは精神が向上し、身体は元気を回復し、よりすぐれた希望と勇気をもって、新たな働きに従事する備えをして家に帰ることができる。

地上で神に栄光を帰すのは、日々の生活におけるわたしたちの特権であることを信じているので、わたしたちは、この世で単に自分自身の娯楽のために生活したり、自分自身を喜ばせるために生活をすべきではない。わたしたちは人類のためになり、社会を祝福するためにこの地にいたのである。……

わたしたちはここで自然の美を見る。……このような自然の働きを見るとき、心がより高く、自然の神にまで上っていくようにすべきである。心が宇宙の創造主のところまで高められ、そしてわたしたちの益と幸福のために、これらの美しいものをすべて造られた創造主をあがめるべきである。(教会への証 2 巻 586 ～ 589)

わたしたちは休息の時間、レクリエーションの時間、黙想の時間をとらなければならない。(原稿 60、1894 年)

罪人の仲間になってはならない

「わが子よ、悪者があなたを誘っても、それに従ってはならない。……わが子よ、彼らの仲間になってはならない、あなたの足をとどめて、彼らの道に行ってはならない。」(箴言 1:10 ~ 15)

他のどんなものよりも娯楽が一番みたまの働きを妨げます。主はそのことを悲しまれます。(青年への使命 373, 374)

信仰生活と品性がほんものでない人は、とかく娯楽と娯楽を求めて集まりがちで、その影響はまた他人を引きつけます。時には、聖書的なクリスチャンになろうと努力している若い男女がパーティーに招かれることがあります。変人に思われたくないのと、他人のすることをしたいという自然な気持ちから、彼らは、神との接触を多分まだ心や思いに感じたことのない人々の感化の中にはいつて行きます。もし祈りのうちに天の標準を考え、クリスチャンという木になるべき実についてキリストの言われたことばを学んでいたら、彼らはこうした余興がほんとうは、小羊の婚宴への招待を受けないように魂を妨げるために備えられた宴会であることに気がついたでしょう。主の道に注意深く教育された若い人たちが、娯楽の場所に出入りすることによって、人間の感化という魅力に取りつかれ、世俗的な性格の教育と訓練を受けた人々に愛着を覚えるようになります。彼らはキリストのような精神の飾りを持っていない人々と結合することによって、自らを一生の奴隷に売り渡します。ほんとうに神を愛し神に仕える人は、キリストを心に宿していない人々と交際することによって世のレベルまで下がることを恐れます。(同上 391)

あなたは娯楽の場所に参加するよう招かれるであろう。……もしあなたがその時キリストに対して真実であるなら、あなたは自分が欠席することに対して言い訳をしようとはしないで、あなたは神の子であって、あなたの原則は、あなたの主のご臨在を求めることのできない場所に、一度であつても、あなたが出席することを許さないということを、はっきりとつましく断言するであろう。(ユース・インストラクター 1893 年 5 月 4 日)

神はご自分の民が世俗よりもクリスチャン生活のすぐれた点を自分たちの生活で示し、気高く聖なる次元で働いていることを示すよう望んでおられる。(両親、教師、生徒への勧告 324)

神を愛する人々との交際

「わたしは、すべてあなたを恐れる者、またあなたのさとしを守る者の仲間です。」
(詩篇 119:63)

クリスチャンのレクリエーションのためにキリストに従う人々が集まる集まりと娯楽や娯楽のための世的な集まりの間には、はっきりとした相違がある。キリストと聖なる事柄についての祈りと話の代りに、世の人々の唇からは思慮のない笑いや軽薄な会話が出るであろう。彼らの考えは全般的な楽しいひと時を持つことである。彼らの娯楽は愚かさで始まり、虚栄で終る。わたしたちは自分たちの集まりに、非常によく管理された気晴らしとわたしたち自身のきちんとしたふるまいがあることを願っている。そうすれば家に帰る時には、神と人に対する無礼な気持ちのない良心を持つことができる。わたしたちが交わっている人々を、どのような方法であっても傷つけたり、害を与えたことがないという自覚、あるいはその人々に有害な影響を及ぼしてはいないという自覚を持つことができる。(レビュー・アンド・ヘラルド 1886 年 5 月 25 日)

わたしたちは、地上において神に栄光を帰すことが、日々の生活における自分たちの特権であると信じている種類の者である。それはわたしたちがこの世で単に自分自身の楽しみのために生きたり、自分自身を喜ばせるために生きないためである。わたしたちは人類の益のために、また社会を祝福するためにここにいる。(両親、教師、生徒への勧告 336, 337)

真に神を愛する人々は、イエスを愛さない人々の社会と積極的に交わらない。彼らは、クリスチャン社会とクリスチャンの会話が魂にとっての食物であり、神を愛する人々の社会の中で、自分が天の雰囲気の中で呼吸していることに気がつく。クリスチャンは互いに愛と思いやりを訓練する。互いに与えた励まし、互いにあらわした尊敬、キリストに従う者たちの中に見られねばならない助けや教え、譴責、警告、クリスチャンの勧告は彼らの霊的生活を促進する。なぜならクリスチャンの親交は神のご計画によるものだからである。……彼らはすべての人に対して、尊い信仰のような優しい思いやりを持ち、神を愛する人々を引きよせる。そこには世が知らないような親しい交わりがある。(レビュー・アンド・ヘラルド 1894 年 11 月 27 日)

研究 7

七つの封印と生ける神の印



第一の封印と第二の封印

前回、一つずつ解かれていく七つの封印の預言は、実はイエスご自身が、終わりの時について預言された内容の繰り返しであったことを見ました。

それでは、実際にその預言がどのように成就したのかを見ていきましょう。まず、第一の封印からです。これはその時代の神の民、すなわち贖いの契約の対象の歴史と彼らの経験を表しています。

第一の封印：AD31-100 年 黙示録 6:1-2

最後の使徒であったヨハネの没した年がAD100年です。第一の封印は、直接「永遠のいのち」なるイエスを「見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせた」使徒たちの初代教会の経験です。

「小羊がその七つの封印の一つを解いた時、わたしが見ていると、四つの生き物の一つが、雷のような声で『きたれ』と呼ぶのを聞いた。そして見ていると、見よ、白い馬が出てきた。そして、それに乗っている者は、弓を手に持っており、また冠を与えられて、勝利の上にもなお勝利を得ようとして出かけた」（黙示録 6:1, 2）。

- ・ 契約（新しい戒め、はじめの愛）が守られていたとき、彼らは勝利を経験していた
- ・ 「主は、神の国についての福音が、あかしとしてすべての国々に宣べ伝えられることをごぞんじであった。また、聖霊の無限の力で武装した真理

が、悪との戦いに勝利し、血に染まった旗が主に従う者たちの頭上に高らかにひるがえる日の来ることをごぞんじであった」(患難から栄光へ上巻 13) (同 16; 同下巻 310 参照)。「神は、彼ら(イスラエル)が征服に征服を続けていくようにご計画になった」(人類のあけぼの下巻 189)。「月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のよう」に、教会は全世界に出て行って、勝利に勝利を取めなければならない(雅歌 6:10)」(国と指導者下巻 326)。

- ・ 「あなたのもろもろ(すべて)の戒めはまこと(真理)です」(詩篇 119:151)。
- ・ 彼らが初めの愛から離れてしまったとき(黙示録 2:4)
- ・ 「弟子たちは約束が成就されるのを待っていたあいだ、謙遜な心でほんとうに悔い改め、また自分たちの不信心を告白した。彼らは、キリストがなくなられる前にお語りになったことばを思い出しながら、それらの意味を一層深く理解した。既に記憶から消えてしまっていた真理が再び心によみがえってきて、彼らはこれを互いにくり返し合った。そして、救い主について誤解していたことを思い、自責の念にかられた。主のすばらしいご生涯の場面が行列のように一つ一つ彼らの前を通り過ぎた。主の純粋できよらかなご生涯を瞑想しながら、もし、キリストの美しいご品性をあかしする生活をするのができさえすれば、どんな仕事でもむずかしすぎることはなく、どんな犠牲でも大きすぎることはないと思った。もし、過去の三年間をもう一度やりなおすことができるとすれば、弟子たちはどんなにか違った行動をとることだろう。もし、主に再び会うことができさえすれば、どんなにか熱心に、自分たちが主を深く愛していたかを示そうと懸命に努めることであろう。また、不信の言葉や行動で主を嘆かせたことに、どんなにか真心からのおわびを申しあげることであろう。しかし、彼らは、自分たちはゆるされていると考えたとき慰められた。そして、主に対する信仰をできるかぎり勇敢に世の人々の前で告白し、自分たちの不信心の償いをしようと決心した」(患難から栄光へ上巻 30, 31)。
- ・ 「使徒たちの論証がたとえ、明瞭で信服させるものであったとしても、それだけでは、あれほどはっきりと反抗していた偏見を取り除くことはできなかったであろう。聖霊は聖なる力で、人々の心にその論証をはっきり悟

らせた。使徒たちの言葉は、全能者のとぎすまされた矢のように、栄光の主を拒み、十字架につけるほどの恐ろしい罪を犯した人々の罪を悟らせた」(患難から栄光へ上巻 40)。

このように、第一の封印のときに現れた「白い馬」は戒め通りに歩む純潔さを表し、「それに乗っているお方イエス」は、「このお方を証する生活をするのができさえすれば、どんな犠牲でも大きすぎることはないと思っていた」初代教会を通して福音を全世界に伝えながら、勝利の上にも勝利を重ねて出ていかれたのでした。

しかし、その「初めの愛から離れてしまった」。そのとき、最後に残った使徒ヨハネを通して、神は紀元後の全時代にわたって教会を導き慰めるために「キリストの啓示(ヨハネの黙示録)」を与えて下さったのです。そのヨハネも世を去ったのち、第二の封印が解かれました。

第二の封印：100-313 AD 黙示録 6:3, 4 (各時代の犬争闘上巻 1-42)

「小羊が第二の封印を解いた時、第二の生き物が『きたれ』と言うのを、わたしは聞いた。すると今度は、赤い馬が出てきた。そして、それに乗っている者は、人々が互に殺し合うようになるために、地上から平和を奪い取ることを許され、また、大きなつらさを与えられた」(黙示録 6:3, 4)。

- 色の変化(教理、民の状態)

「白い」馬から「赤い」馬へと色が変わったことは、教理の状態、また民が「純潔」から離れてしまった状態を表しています。

- 地上から平和を奪い取ることを許され

「それを望まないなら、わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」(イザヤ 27:5)。真の平和はイエスとの平和にあります。そして、このお方はその平和をカルバリーの十字架で成し遂げられました。これが契約の血潮です。そして、その契約を立ててくださったお方こそキリストでした。しかし、その契約の条件である律法から離れると

き、平和の君との関係は壊され、平和は奪い去られるのです。「罪の贖いのための十字架の犠牲は、他のすべての真理の中心である。創世記から黙示録まで、神の言葉が正しく理解され、真価が認められるためには、救い主の贖罪の驚くべき真理との関連性と、カルバリーの十字架から流れる光の中で研究されるべきである。贖い主の大いなる犠牲について研究する者は、恵みと知識のうちに成長する。わたしは、あなたの前に、恵みと改心、救いと贖いの大いなる記念碑、すなわちカルバリーの十字架にかけられた神の御子を掲げる。これが、すべての説教のテーマでなければならない。キリストは言われる、『そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引き寄せるであろう』と」(SDA パイプ・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 5 巻 1137,1138 (ヨハネ 12:32 コメント))。「イザヤはメシヤの誕生を預言して、彼を『平和の君』と呼んだ。また天使たちは、キリストの誕生を羊飼いたちに告げたとき、『いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように』とベツレヘムの平原の上で歌った (ルカ 2:14)。これらの預言の言葉と、『平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきた』というキリストの言葉との間には、一見、矛盾があるように思われる (マタイ 10:34)。しかし、正しく理解されるならば、この二つは完全に一致している。福音は平和のメッセージである。キリスト教は、それを受け入れて従うならば、全地を平和と一致と幸福で満たすものである。キリストの宗教は、その教えを受け入れるすべての者を親しい兄弟関係に入れる。イエスのメッセージは、人々を神と和解させ、そしてお互いに和解させることであった。しかし世界は一般に、キリストの大敵サタンの支配下にある。福音が彼らに、彼らの習慣や欲望と全く異なった生活の原則を示すために、彼らはそれに反逆する。彼らは自分たちの罪を指摘し非難する純潔を憎む。そして、その公正で神聖な要求を守るように勧める人々を、彼らは迫害し滅ぼすのである。福音のもたらす崇高な真理は、憎しみや争いを引き起こすことになるために、この意味において、福音は剣であると言われているのである」(各時代の斗争闘上巻 40)。「彼と結んだわが契約は、生命と平安との契約であって、わたしがこれを

彼に与えたのは、彼にわたしを恐れさせるためである。彼はすでにわたしを恐れ、わが名の前におののいた。彼の口には、まことの律法があり、そのくちびるには、不義が見られなかった。彼は平安と公義とをもって、わたしと共に歩み、また多くの人を不義から立ち返らせた」(マラキ 2:5, 6)。「神の律法を無にした結果を知りたいだろうか。その実験は試みられた。フランスにおいて、無神論が支配的な勢力となった時に演じられた光景は、恐るべきものであった。神が課せられた拘束を投げ捨てることは、最も残酷な暴君サタンの支配を受け入れることであるということが、そのとき世界に証明された。義の標準が廃されるときに、悪の君がこの地上に権力を打ち立てる道が開かれる。……人々に神の戒めを軽んじるように教えるものは、不従順の種をまき、不従順を刈り入れる。神の律法によって課せられている拘束を全部取り去るならば、人間の法律もまもなく無視されるであろう。神は不正な慣習、貪欲、虚偽、詐取を禁じておられるので、人々は自分たちが世俗的に繁栄する道の障害として、神の戒めをやすやすとふみにじる。しかし、これらの戒めを追い払った結果は、彼らの予期しなかったものとなるであろう。……」(各時代の大争闘下巻 346, 347)。第二の封印の解かれたときの経験がどのようなものであったか、それはまさにこの短い預言の中に記されている通りのものでした。しかし、このような中であって、主との関係を保つ忠実な者のために、主の憐れみ深い御心は成し遂げられたのでした。

- ・ そして、人々が互に殺し合うようになる

「人々は、道理をわきまえなかった。彼らは理性を越えた衝動と盲目的な激しい怒りに支配された。彼らは、悪魔的残酷さをあらわしてきた。家庭においても国家においても、上流階級においても下層階級においても一様に、疑い、ねたみ、憎しみ、争闘、反逆、殺人などが行なわれた。どこも安全ではなかった。友人も親族も、互いに裏切り合った。親は子供を殺し、子供は親を殺した。国民の指導者たちは、自分自身を統御する力がなかった。押えきれない感情が彼らを暴君にした。ユダヤ人は、神の罪なきみ子を罪に定めるために、偽証を受け入れたのであった。そして今、偽証が、彼ら自身の生命を脅かしていた。彼らは、その

行動によって、長い間、「われらが前にイスラエルの聖者をあらしむるなかれ」と言ってきた（イザヤ書 30:11 文語訳）。今、彼らの願いはかなえられた。彼らはもう神を恐れなくなった。サタンが、国家のかしらとなった。そして政治と宗教の最高の権威者たちは、彼の支配下にあった。対立する諸党派の指導者たちは、時には結束して、哀れな犠牲者たちを襲って苦しめるかと思うと、今度は互いに攻め合い無慈悲に殺害し合った。神聖な神殿でさえ、彼らの恐ろしい残忍さをとどめることができなかった。礼拝者が祭壇の前で殺され、聖所は死体によって汚された」（各時代の犬争闘上巻 15, 16）。「権力者が、窮乏に陥った者から、隠しているわずかの食物を奪い取るために加えた拷問は、実に残忍なものであった。こうした残忍なことは、十分に食物を持っていながら、ただ将来のために蓄えておこうとする人々によって、しばしば行なわれたのであった。無数の者が、飢えと病気で倒れた。人間本来の自然な愛情は失われてしまったように思われた。夫は妻から、妻は夫から奪った。子供は、老いた親の口から食物をもぎ取った。『女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまぬようなことがあるか』という預言者の問いに対して、滅亡にひんした城内から次のような答えがあった。『わが民の娘の滅びる時には情深い女たちさえも、手ずから自分の子どもを煮て、それを食物とした』（イザヤ書 49:15, 哀歌 4:10)。また、それより 1400 年前に与えられた警告の預言が成就した。『またあなたがたのうちのやさしい、柔和な女、すなわち柔和で、やさしく、足の裏を土に付けようとしぬ者でも、自分のふところの夫や、むすこ、娘にもかくして、……自分の産む子をひそかに食べるであろう。敵があなたの町々を囲み、激しく攻めなやまして、すべての物が欠乏するからである』（申命記 28:56, 57)」（各時代の犬争闘上巻 19, 20）。「怒り狂った兵隊たちは、神殿に隣接したへやにたいまつを投げ込み、そこに避難していた多くの者を剣にかけて殺した。血が神殿の階段を川のように流れた。幾千というユダヤ人が死んだ。……ティトウスは、兵隊たちの激しい怒りをしずめることが不可能であることを知って、将校たちと共に中にはいり、神殿の内部を調査した。彼らは

その壮麗さに目を見張った。そして、火はまだ聖所まで回っていなかったので、必死になってこれを守ろうとし、飛び出して行って、ふたたび兵隊たちに火の進行を止めるように訴えた。百卒長リベラリスは、その職権によって、服従をしようと試みた。しかし、皇帝への尊敬でさえ、ユダヤ人に対する激しい敵意と戦いの恐ろしい興奮と略奪に対する飽くことを知らない欲望の前には、どうする力もなかった。……だれも気づかないうちに、一兵卒が、とびらのちょうつがいの間から火のついたたいまつを中に投げ入れた。建物全体は、一瞬のうちに炎に包まれた。……『それは、ローマ軍にとって恐るべき光景であった。では、ユダヤ人にとってはどうであったか。全市を見おろす山頂全体が噴火山のように燃え上がった。建造物は次々と大音響を立てて倒れ、火の海にのまれた。……走り回るローマの兵隊の叫び声や、炎の中で倒れる反乱兵たちのうめき声が、猛火のうなりと材木の落下する大音響に混って聞こえた。高台の人々の叫び声が山々にこだまし、城壁の回り一面に、泣き叫ぶ声と嘆き悲しむ声が満ちた。飢えて死にひんしている人々は、わずかに残った力をふりしぼって、苦悩と悲痛の叫びをあげた。城内の殺害は、城外の光景よりいっそう悲惨なものであった。男も女も、老いも若きも、反乱兵も祭司も、戦った者もあわれみを請うた者も、みな差別なく殺害された。殺された者の数は、殺害者の数を上回った。軍隊は死者の山をよじのぼって、絶滅の仕事を続けねばならなかった』(Milman, "History of the Jews," b.6)。……包囲とその後の虐殺によって死んだ者は百万人以上であった」(各時代の
大争闘上巻 21～24)。

- また、大きなつぎを与えられた
「オリブ山上から救い主は、使徒時代の教会にふりかかろうとしていた嵐を見られた。……彼はここで、簡単ではあるがきわめて重大な発言によって、この世の支配者が神の教会をどう扱うかを予告された(マタイ 24:9, 21, 22 参照)。……初代教会の歴史は、救い主のみ言葉の成就を立証した。地と黄泉の力は、信徒たちに立ち向かうことによって、キリストに対抗した。異教は、もし福音が勝利を収めるならば、自分たちの神殿と祭壇は一掃されてしまう

と予想し、そのために全力を挙げてキリスト教を撲滅しようとした。迫害の火が点じられた。キリスト者たちは持ち物を奪われ、家から追われた。彼らは、『苦しい大きな戦いによく耐えた』（ヘブル 10:32）。彼らは、『あざけられ、むち打たれ、しほり上げられ、投獄されるほどのめに会った』（同 11:36）。多くの者は、彼らのあかしに血の印をおした。貴族も奴隷も、金持ちも貧乏人も、知者も無知なものも一様に容赦なく殺された。ネロのもとで、パウロが殉教したころに始まったこのような迫害は、その激しさに多少の差はあったが、数世紀間続いた。……彼らは、ローマ帝国の反逆者、宗教の敵、社会の害毒であると非難された。数多くの者が円形劇場で、野獣の餌食になり、生きながら火で焼かれた。十字架に架けられた者たちもあれば、野獣の皮を着せられて闘技場に投げ込まれ、犬にかみ裂かれた者たちもあった。……キリストに従う者たちは、どこに避難しても、野獣のように狩り出された。彼らは荒涼として人跡まれなところにかくれがを求めなければならなかった。『無一物になり、悩まされ、苦しめられ、（この世は彼らの住む所ではなかった）、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた』（ヘブル 11:37, 38）。カタコンベ（地下墓所）は、幾千の人々の避難所となった。ローマ市外の丘の下には、土や岩を掘って造った長い地下道が網状に交錯して、城外に幾マイルも広がっていた。キリストに従う者たちは、この地下のかくれがに死者を葬った。また、彼らが嫌疑をかけられ、追放されたときには、ここをすみかとした。善き戦いを戦った者たちを生命の君が呼びさまされるとき、これらの暗いほら穴の中から、キリストのために殉教した多くの者たちが出てくるのである。……」（各時代の大争闘 上巻 29～34）。

- ・ ローマのつるぎ（サタン）

「これらの象徴が用いられている一連の預言は、黙示録 12 章から、キリストを誕生の時に滅ぼそうとした龍から、始まっている。龍は、サタンであると言われている（同一二ノ九）。救い主を殺すためにヘロデを動かしたのは、サタンであった。しかし、キリスト教時代の初期において、キリストと彼の民に戦いをいどんだサタンの主力は、ローマ帝国であり、そこにおいて最も有力な宗教は、異教であった。こうして、龍は、第一義的

にはサタンを表わすが、第二義的には異教ローマの象徴である」(各時代の大争闘下巻 157)。

- 忠実な者には迫害(殉教)

「わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう」(ヨハネ 15:20)。

- 不従順な者には流血
- 神はご自分の代表者たちを広く、他の人々のために働ける所へ散らすために、迫害が彼らに及ぶことをお許しになった。

「エルサレムの教会をおそった迫害は、福音の働きに強い刺激を与える結果になった。エルサレムでのみことばの宣教は成功していたので、弟子たちには、全世界に出て行けとの救い主のご命令をなおざりにして、いつまでもそこにとどまる危険があった。悪に抵抗する力は、活動的な奉仕によって最も多く得られるということを忘れて、彼らは敵の攻撃からエルサレムの教会をかばうほど重要な仕事はないと思いはじめていた。彼らは新しく改心した人たちに福音を宣べさせる教育をするどころか、既になし遂げられた事に、みんなで満足しているだけで終わってしまうような危険に陥っていた。神はご自分の代表者たちを広く散らして、その行く先々で他人のために働くことができるように、彼らの上に迫害の手がのびるままにしておかれた。信者たちはエルサレムを追われて、『御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた。』」(患難から栄光へ上巻 109)。

- 神はご自分の民の清めのためにお許しになった。

うに星が博士たちの案内役として送られたかを知っていました。それでありながら、彼はイエスさまを滅ぼそうと決心していました。彼は怒って、「ベツレヘム……にいる二歳以下の男の子を、ことごとく殺すために兵士たちをつかわしたのでした (マタイ 2:16)。

人が神さまに対して戦うとは、なんとおかしいことでしょう! 罪のない子どもたちが殺されるこの光景はなんと恐ろしいものだったことでしょう! ヘロデは以前にもたくさんの残酷なことをしていました。しかし、彼の邪悪な生涯はまもなく終わるのでした。彼は恐ろしい死に方で死にました。

ヨセフとマリヤはヘロデが死ぬまでエジプトにとどまっていました。その後、御使がヨセフに現れて言いました、「立って、幼な子とその母を連れて、イスラエルの地に行け。幼な子の命をねらっていた人々は、死んでしまった」 (マタイ 2:20)。

ヨセフはイエスさまがお生まれになったベツレヘムに自分の家庭をもちたいと願っていました。しかし、ユダヤに近づいたとき、彼はヘロデの息子が父親の代わりに統治していることを知りました。

そのために、ヨセフはそこへ行くことを恐れ、どうしてよいかわからなくなりました。そのため、神さまは彼に教えるために天使をつかわしてくださいました。天使の指示に従いながら、ヨセフは自分のかつてのふるさとであるナザレへ戻りました。

冷やし中華 (2 人分)

■材料

ひやむぎ	2 束
きゅうり	1 本
たまねぎ	1/2 個
にんじん	1/4 個
ミニトマト	5 個
もやし	1/2 袋
味しめじ	1/2 パック
(たれの材料)	
しょうゆ	大さじ 4
レモン汁	大さじ 4
粗糖	大さじ 1
ごま油	小さじ 1
粉末昆布だし	適量
ごま	適量

■作り方

1. きゅうりとにんじんは細切りにする。
2. 味しめじはごま油（材料外）で炒める。
3. たまねぎは輪が出るように薄くスライスする。
4. トマトは半分に切る。
5. もやしはさっとゆがく。
6. ひやむぎをやわらかめにゆがいて、水で冷やす。
7. もやしを下に敷き、そのうえに麺をおく。
8. その上にスライスしたたまねぎを敷き、その上にきゅうりとにんじんと味しめじをのせ、一番上にトマトを飾る。
9. だしの材料をすべて入れて、よくかき混ぜる。
10. 盛りつけた麺の上から、お好みの量のたれをかけ、よく混ぜてお召し上がりください。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第7話 エジプトへ

ヘロデがイエスさまを礼拝しに行きたいと言ったとき、正直に話したのではありませんでした。彼は救い主が成長して王となり、自分の王国をうばうことを恐れたのです。

彼はこの子を殺すために、さがしたいと思いました。

博士たちはもどって、ヘロデに伝えようとしていました。しかし、主の使が彼らの夢に現れて、別の道から家路につかせました。

「彼らが帰って行ったのち、見よ、主の使が夢でヨセフに現れて言った、『立って、幼な子とその母を連れて、エジプトに逃げなさい。そして、あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子を探し出して、殺そうとしている』(マタイ 2:13)。

ヨセフは朝まで待ちませんでした。彼はすぐに立ち上がり、マリヤと子連れて、夜のうちに長い旅を始めました。

博士たちはイエスさまに高価な贈り物をささげていました。このような方法で神さまは彼らが自分の国に帰るまでの旅の費用と、エジプトの滞在費用を備えてくださったのでした。

ヘロデは博士たちが別の道から自分の国へ帰ってしまったことを知って、

たいへん怒りま

した。ヘロデは神さまがご自分の預言者によって、キリストの来臨について何と云っておられたかを知っていました。

彼はどのよ

